



中電資料②

## 来島ダムからの常時毎秒 2 m<sup>3</sup>放流に伴う下流河川の環境変化の 状況について

---

神戸川の河川環境等に関する協議会

中国電力株式会社  
2023年3月23日

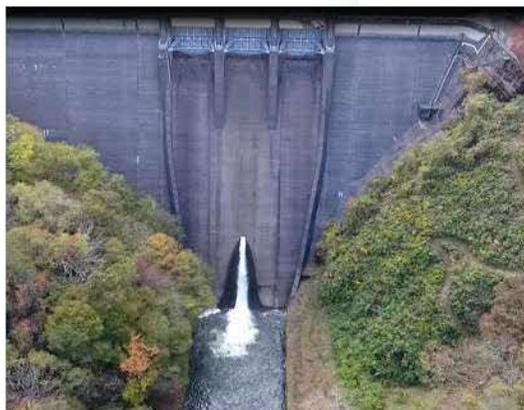
### 報告事項

- 来島ダムからの常時毎秒 2 m<sup>3</sup>放流（2013年6月13日から試験的増放流として常時毎秒 2 m<sup>3</sup>、2017年3月10日以降は確認書に基づく環境放流として常時毎秒 2 m<sup>3</sup>）による、来島ダム下流河川の環境変化の状況について報告する。
- 調査内容については、神戸川の河川環境に関する専門委員会の提言を反映した取組を継続実施している。

# 1. 常時毎秒 2 m<sup>3</sup>放流の検証（来島ダムからの常時毎秒 2 m<sup>3</sup>の実施状況）

- 2013年6月4日から魚道流量を増加。
- 2013年6月13日から来島ダムからの試験放流（毎秒 2 m<sup>3</sup>）を開始し、窪田発電所および乙立発電所の各堰から増放流相当分の放流を開始。
- 2017年3月10日以降は確認書に基づく環境放流として常時毎秒 2 m<sup>3</sup>の放流を継続中。

## 来島ダム



2013.6.12以前  
窪田堰（魚道）  
放流量 毎秒0.078m<sup>3</sup>以上



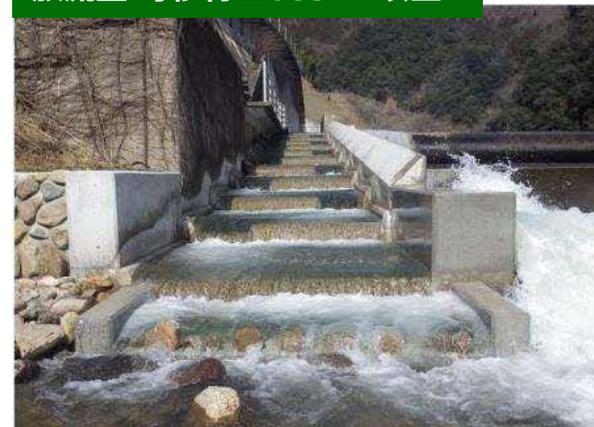
2013.6.13以降  
窪田堰（魚道+切欠き部）  
放流量 毎秒約2.078m<sup>3</sup>以上



2013.6.12以前  
八幡原堰（魚道）  
放流量 毎秒0.059m<sup>3</sup>以上



2013.6.13以降  
八幡原堰（魚道）  
放流量 毎秒約2.059m<sup>3</sup>以上



# 1. 常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流の検証（調査概要）

## （1）河川調査（P5～20）

目 的	写真撮影と現地調査により、河川の水量感の変化を確認
調査内容	a. 写真撮影 水面幅（W）と見かけの河川幅（B）の割合（W/B）により水量感を確認 b. 現地調査 減水区間の水面幅と水深を実測
調査地点	a. 写真撮影 来島ダム直下から馬木堰までの10地点 b. 現地調査 窪田・乙立発電所の減水区間
調査日	2013年5月～2017年3月（1回/月）、2017年5月～ 継続中（1回/3箇月）

## （2）流量データ確認（P21～27）

目 的	常時 2 m <sup>3</sup> /s 放流量の流下状況を確認
調査内容	堰の放流量、観測所の流量のデータを確認
調査地点	窪田・乙立発電所の堰、八神・菅田・馬木の観測所
調査日	2013年6月13日～ 継続中

# 1. 常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流の検証（調査概要）

## （3）生物調査（P28～46）

2013年度	目 的	発電所減水区間の魚類の分布・生息状況の変化を確認
	調査内容※	a. 採捕調査 （神戸川漁協の調査協力により実施）
	調査地点	窪田発電所の減水区間（全域：約2.4km） 乙立発電所の減水区間（八幡原取水堰～波多川合流地点：約1.5km）
	調 査 日	2013年6月～ 継続中
2014年度	目 的	堰上下流の生態系の変化を確認
	調査内容※	b. 潜水観察調査、c. 採餌調査、d. 底生動物調査、 e. 付着藻類調査
	調査地点	窪田・乙立発電所の堰上下流
	調 査 日	2014年6月～ 継続中

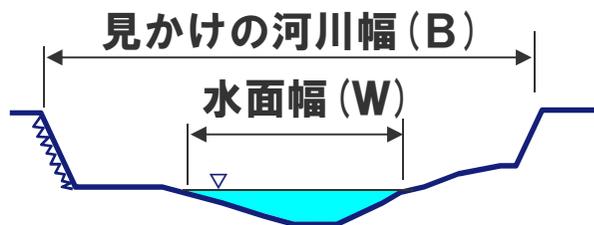
※生物調査は、平成28年度版 河川水辺の国勢基本調査マニュアル（平成28年1月）等に準拠した調査方法により実施

## (1) 河川調査

目 的	写真撮影と現地調査により、河川の水量感の変化を確認
調査内容	a. 写真撮影 水面幅 (W) と見かけの河川幅 (B) の割合 (W/B) により水量感を確認 b. 現地調査 減水区間の水面幅と水深を実測
調査地点	a. 写真撮影 来島ダム直下から馬木堰までの10地点 b. 現地調査 窪田・乙立発電所の減水区間
調査日	2013年5月～2017年3月 (1回/月)、2017年5月～ 継続中 (1回/3箇月)

### 水量感調査 (W/B) の評価基準

#### W/Bの河川断面イメージ



国土交通省の「正常流量検討の手引き(案)(平成19年9月)」によると、W/Bが20%以上 あれば水量感が豊かであるとの評価が得られている。

## 【正常流量検討の手引き（案）】

### みかけの水面幅と河川幅による評価基準の研究成果 抜粋

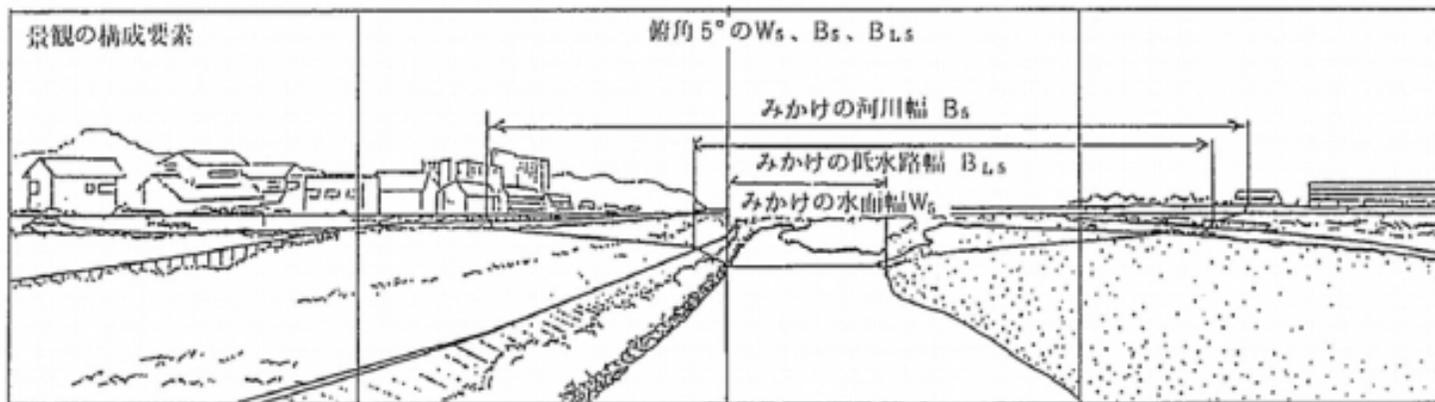


図 パラメータW/Bの算出法

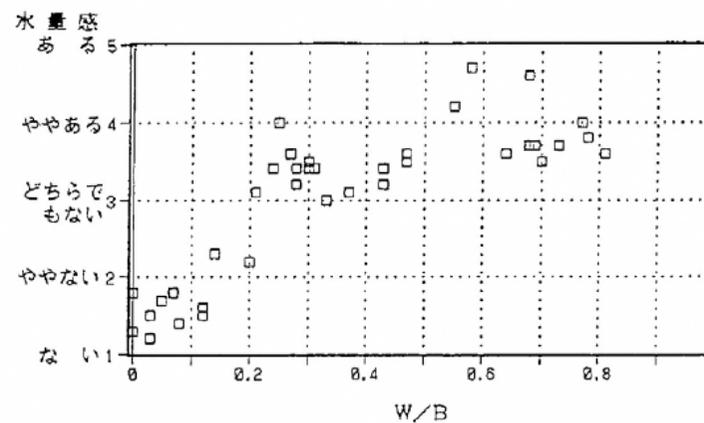


図 水量感-W/Bの関係

出典：正常流量検討の手引き(案)[国土交通省河川局河川環境課](平成19年9月)

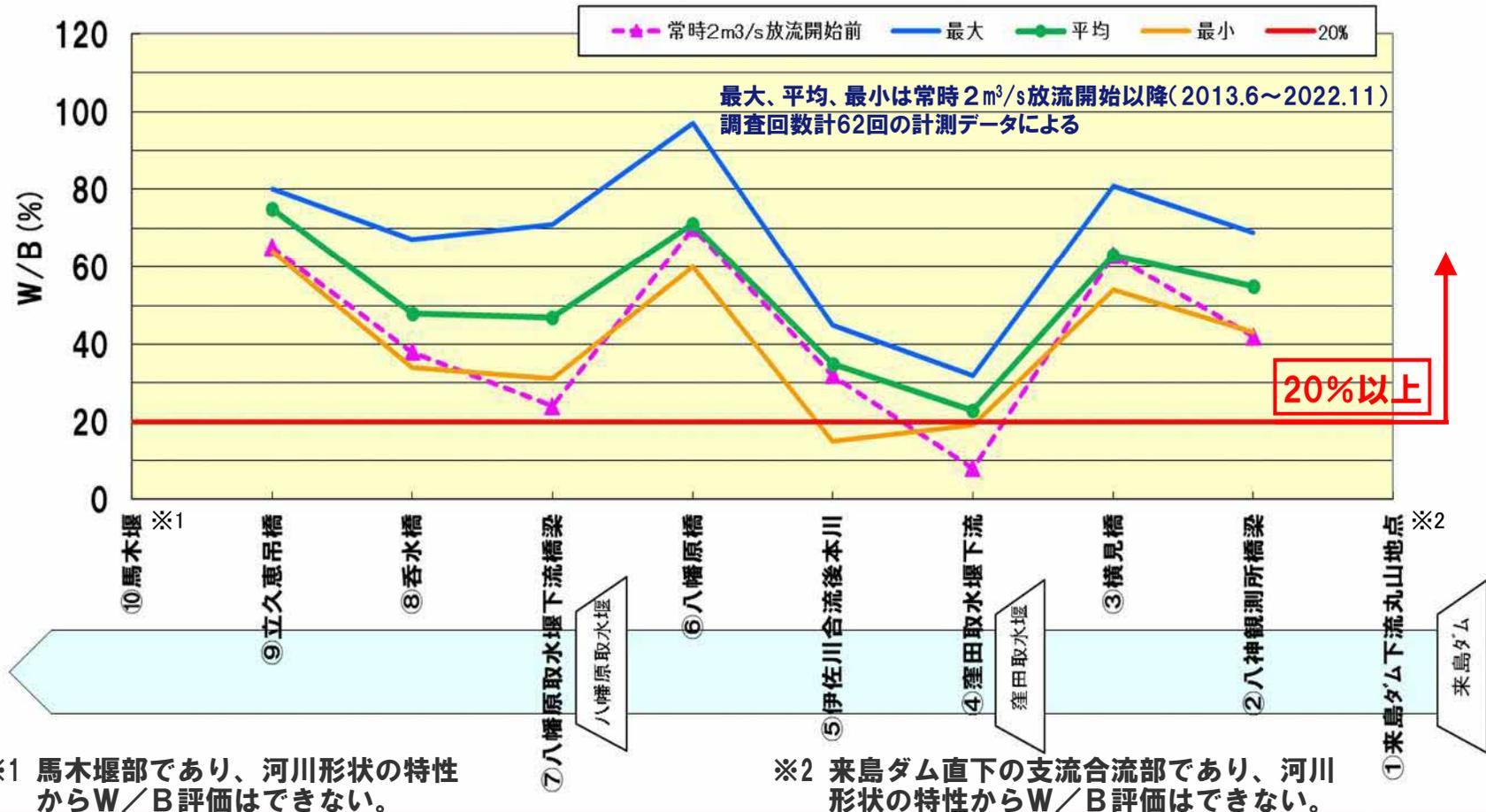
(1) 河川調査 a. 写真撮影〔水量感調査〕位置図

調査地点	
①	来島ダム下流丸山地点
②	八神観測所橋梁
③	横見橋
④	窪田堰下流アーチ橋
⑤	伊佐川合流後本川
⑥	八幡原橋
⑦	八幡原堰下流橋梁
⑧	香水橋
⑨	立久恵吊橋
⑩	馬木堰



# (1) 河川調査 a. 写真撮影 各調査地点のW/B

- W/Bは、常時2m<sup>3</sup>/s放流開始前に比べて各地点において大きくなる傾向が認められ、特に窪田発電所および乙立発電所減水区間の増加が著しい。
- 常時2m<sup>3</sup>/s放流開始後のW/Bは、全ての箇所において水量感が豊富であるとされる20%以上に概ねなっている。



# (1) 河川調査 a (① 来島ダム下流 丸山地点)

○水位がやや上昇した。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	-※	約1. 3
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	-※	約2. 0

※ 来島ダム直下の支流合流部であり、河川形状の特性からW/B評価はできない。



9年経過



(1) 河川調査 a (2) 八神観測所橋梁

- 水位変化は見られない。
- 実施後9年が経過し、水面幅が安定。

年月日	ダム放流量 ( $m^3/s$ )	W/B (%)	河川流量 ( $m^3/s$ ) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	42	約1. 7
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	68	約2. 0



9年経過



(1) 河川調査 a (③横見橋)

- 水位変化は見られない。
- 実施後9年が経過し、水面幅が安定。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	63	約3
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	63	約4. 2



9年経過



(1) 河川調査 a (④窪田堰下流アーチ橋：減水区間)

- 改善後は水位上昇による転石の水没が顕著に見られ水量感が増加。
- 実施後9年が経過し、水面幅が安定。

年月日	ダム放流量 ( $m^3/s$ )	W/B (%)	河川流量 ( $m^3/s$ ) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	8	約0. 3
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	25	約3



9年経過



(1) 河川調査 a (⑤伊佐川合流後本川)

- 改善前の状態でもある程度の水量感がある。
- 出水で砂州ができ、水面幅が減少した。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	3 2	約5
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	1 8	約6. 4



9年経過



(1) 河川調査 a (⑥八幡原橋)

- 改善前の状態でもある程度の水量感がある。
- 河道の形態から、水面幅の変化はほとんど見られない。

年月日	ダム放流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )	W/B (%)	河川流量 ( $\text{m}^3/\text{s}$ ) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	70	約5
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	64	約6. 4



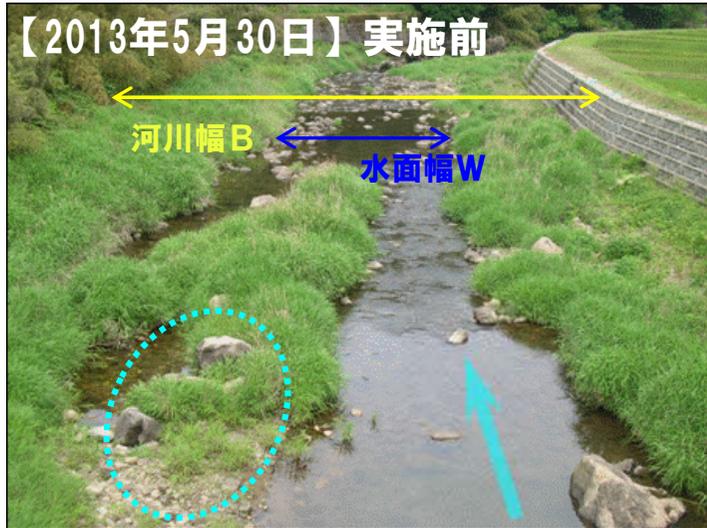
9年経過



(1) 河川調査 a (⑦八幡原堰下流橋梁：減水区間)

- 改善後は水面幅、水深が増加した。
- 実施後9年が経過し、水面幅が安定。

年月日	ダム放流量 ( $m^3/s$ )	W/B (%)	河川流量 ( $m^3/s$ ) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	24	約0. 1
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	63	約2. 4



9年経過



(1) 河川調査 a (⑧香水橋：減水区間)

○改善後は転石、河床の水没が顕著に見られ水量感が増加。

年月日	ダム放流量 ( $m^3/s$ )	W/B (%)	河川流量 ( $m^3/s$ ) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	3 8	約 3
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	5 4	約 2. 4



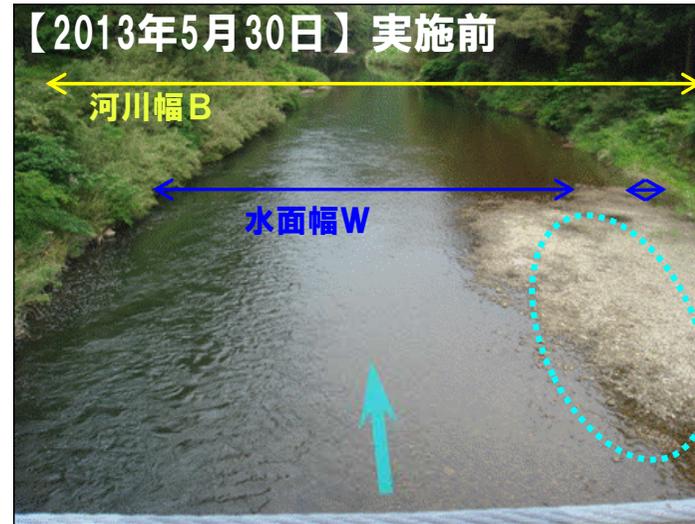
9年経過



(1) 河川調査 a (⑨立久恵吊橋)

○改善後は、河床の水没が  
 顕著に見られ水量感が増加。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	6 5	約 3
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	6 4	約 2. 4



9年経過



# (1) 河川調査 a (⑩馬木堰)

○堰の越流がやや増加した。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	-※	約 8
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	-※	約 9. 2

※ 馬木堰部であり、河川形状の特性からW/Bは評価はできない。



9年経過

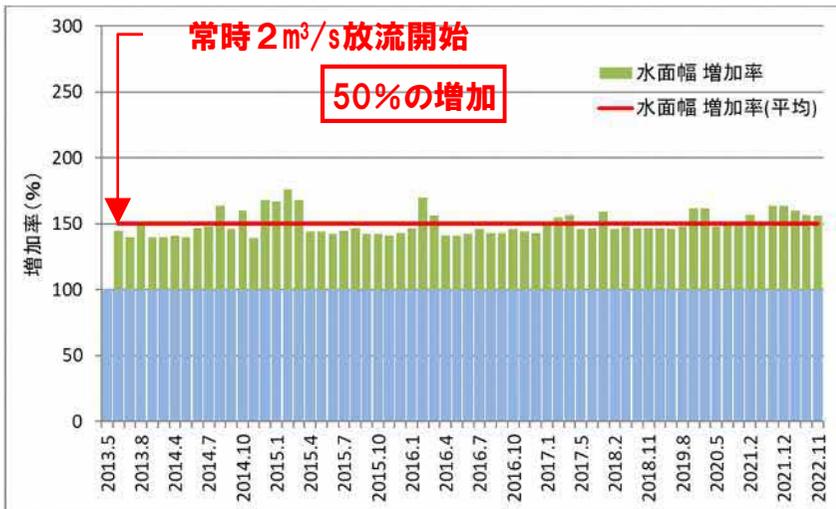


# (1) 河川調査 b. 現地調査 (窪田発電所 減水区間)

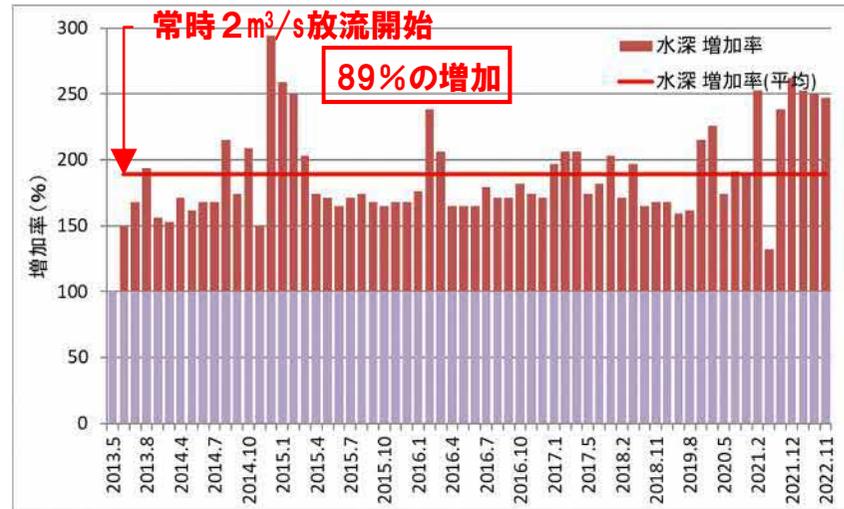
- 常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流後は露出していた転石のほとんどが水没し、平均水面幅および平均水深の増加率が常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流前に比べて水面幅50%、水深89%増加している。
- 水量感が改善され約9年経過後も継続している。



【水面幅 増加率※】



【水深 増加率※】



※ 増加率：常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流開始前を100%とする。

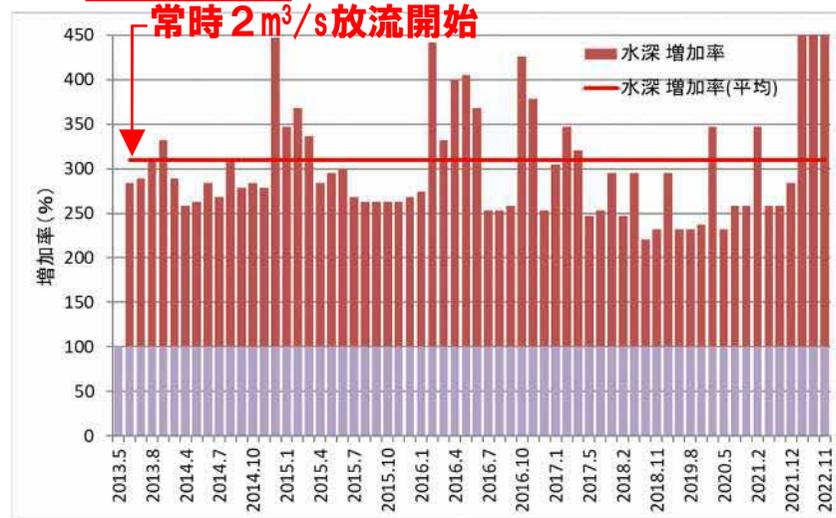
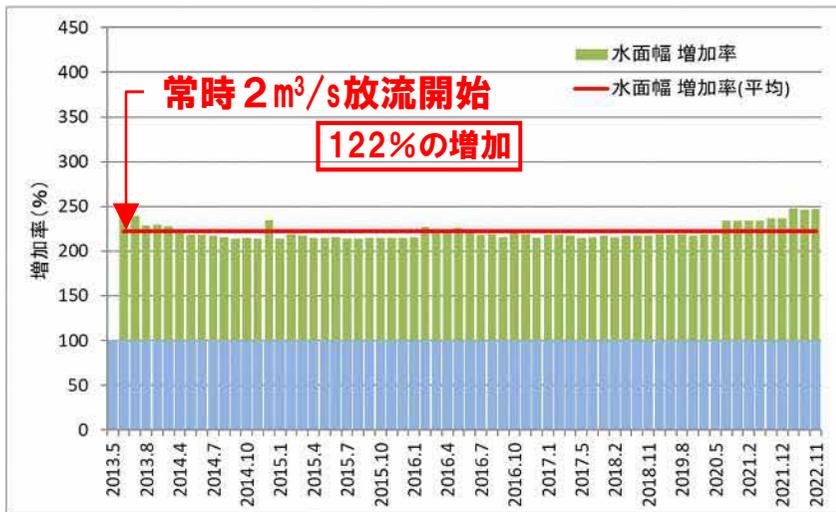
# (1) 河川調査 b. 現地調査 (乙立発電所 減水区間)

- 常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流後は露出していた転石のほとんどが水没し、平均水面幅および平均水深の増加率が常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流前に比べて水面幅122%、水深209%増加している。
- 水量感が改善され約 9 年経過後も継続している。



【水面幅 増加率※】

209%の増加 【水深 増加率※】



※ 増加率：常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流開始前を 100% とする。

(1) 河川調査

目 的	写真撮影と現地調査により、河川の水量感の変化を確認
調査内容	a. 写真撮影 水面幅（W）と見かけの河川幅（B）の割合（W/B）により水量感を確認 b. 現地調査 減水区間の水面幅と水深を実測
調査地点	a. 写真撮影 来島ダム直下から馬木堰までの10地点 b. 現地調査 窪田・乙立発電所の減水区間
調査日	2013年5月～2017年3月（1回/月）、2017年5月～ 継続中（1回/3箇月）

(2) 流量データ確認

目 的	常時 2 m <sup>3</sup> /s 放流量の流下状況を確認
調査内容	堰の放流量、観測所の流量のデータを確認
調査地点	窪田・乙立発電所の堰、八神・菅田・馬木の観測所
調査日	2013年6月13日～ 継続中

## (2) 流量データ確認 位置図

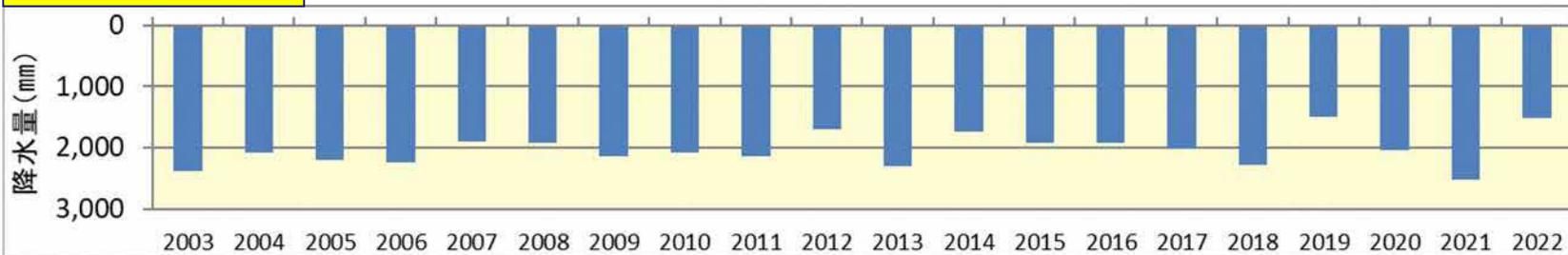
流量データ確認地点	
①	八神観測所
②	窪田堰
③	菅田測水所
④	八幡原堰
⑤	馬木観測所



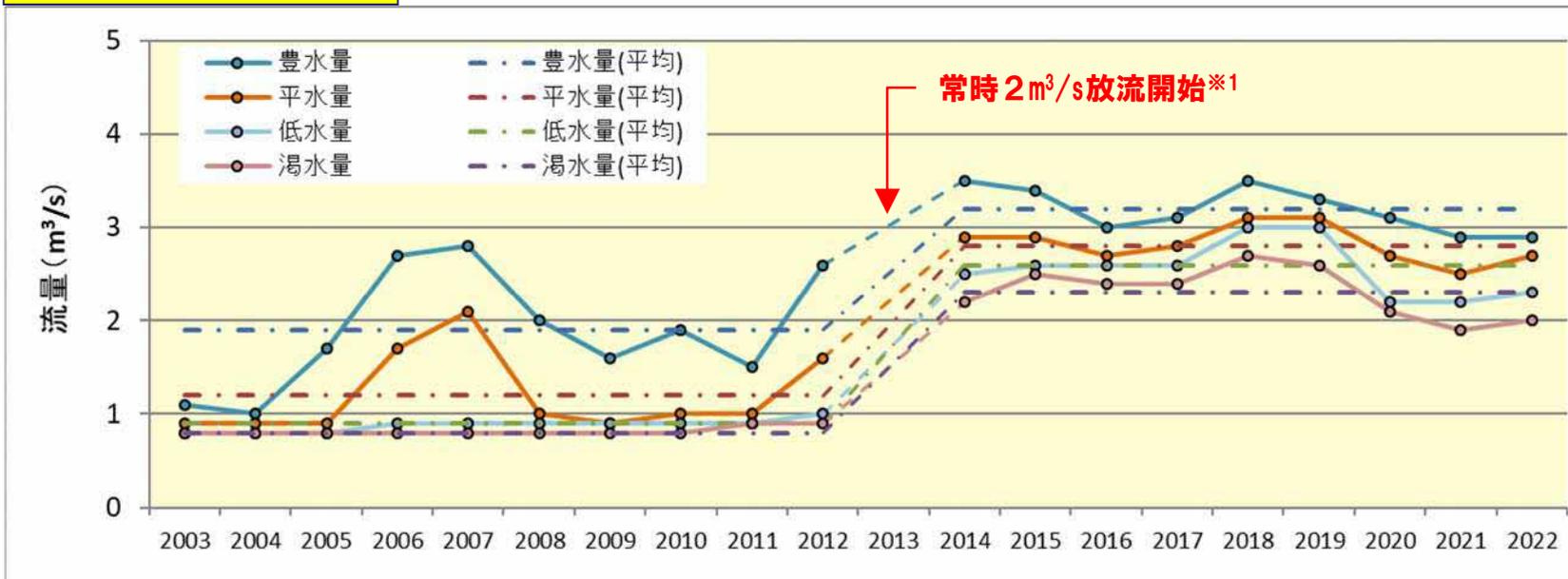
## (2) 流量データ確認 (①八神水位観測所の河川流量)

○八神水位観測所地点では、常時  $2 \text{ m}^3/\text{s}$  放流前の10年平均流況に比べて常時  $2 \text{ m}^3/\text{s}$  放流後の流況は大幅に増加し、常時  $2 \text{ m}^3/\text{s}$  の効果が維持されている。

来島ダム年間降水量



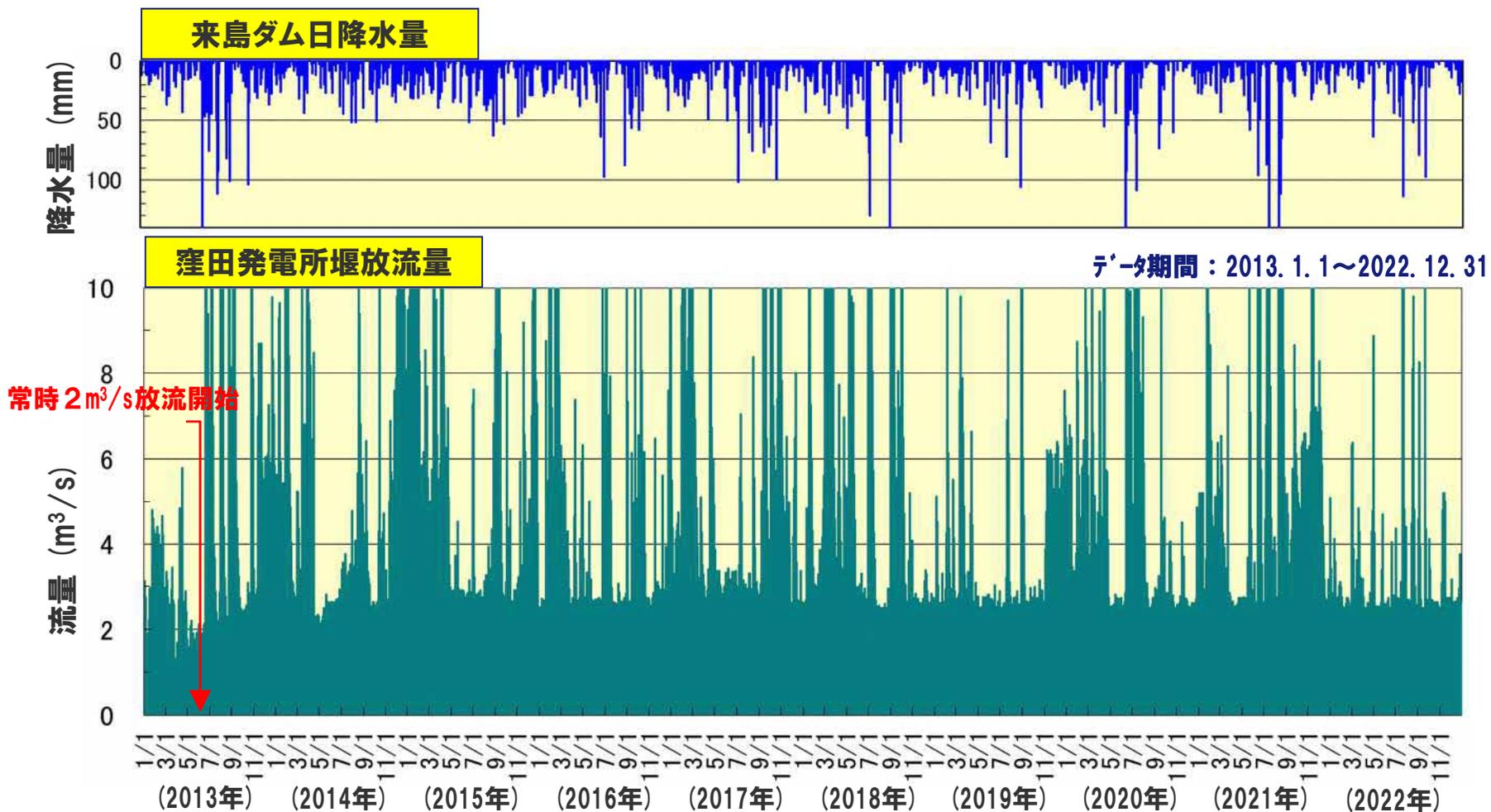
八神水位観測所河川流量



※1 2013年6月から増放流を開始しているため、2013年の流況は表示しない。

## (2) 流量データ確認 (②窪田発電所窪田堰の放流量)

○窪田発電所窪田堰は、増放流前から堰越流の頻度が高く、常時  $2\text{ m}^3/\text{s}$  放流後はさらに堰下流への放流量が増加し、河川流況が安定している。

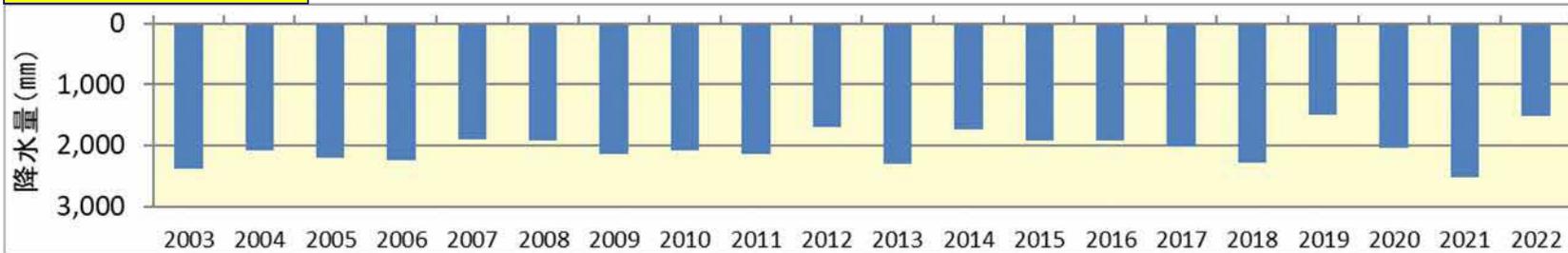


注：期間中、断水作業等のため放流量が算定できない場合は、菅田流量－残流域流量により放流量を計算。

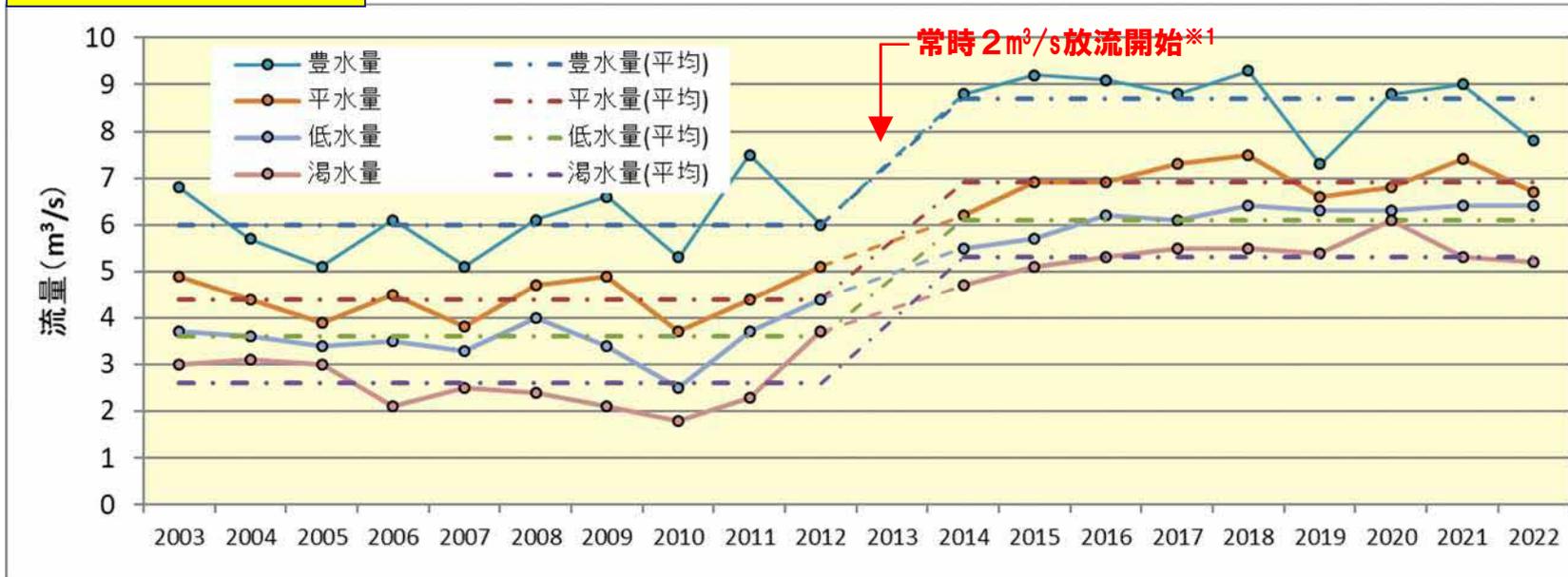
## (2) 流量データ確認 (③菅田測水所の河川流量)

○菅田測水所地点では、常時2m<sup>3</sup>/s放流前の10年平均流況に比べて常時2m<sup>3</sup>/s放流後の流量が増加し、常時2m<sup>3</sup>/s放流の効果が維持されている。

来島ダム年間降水量



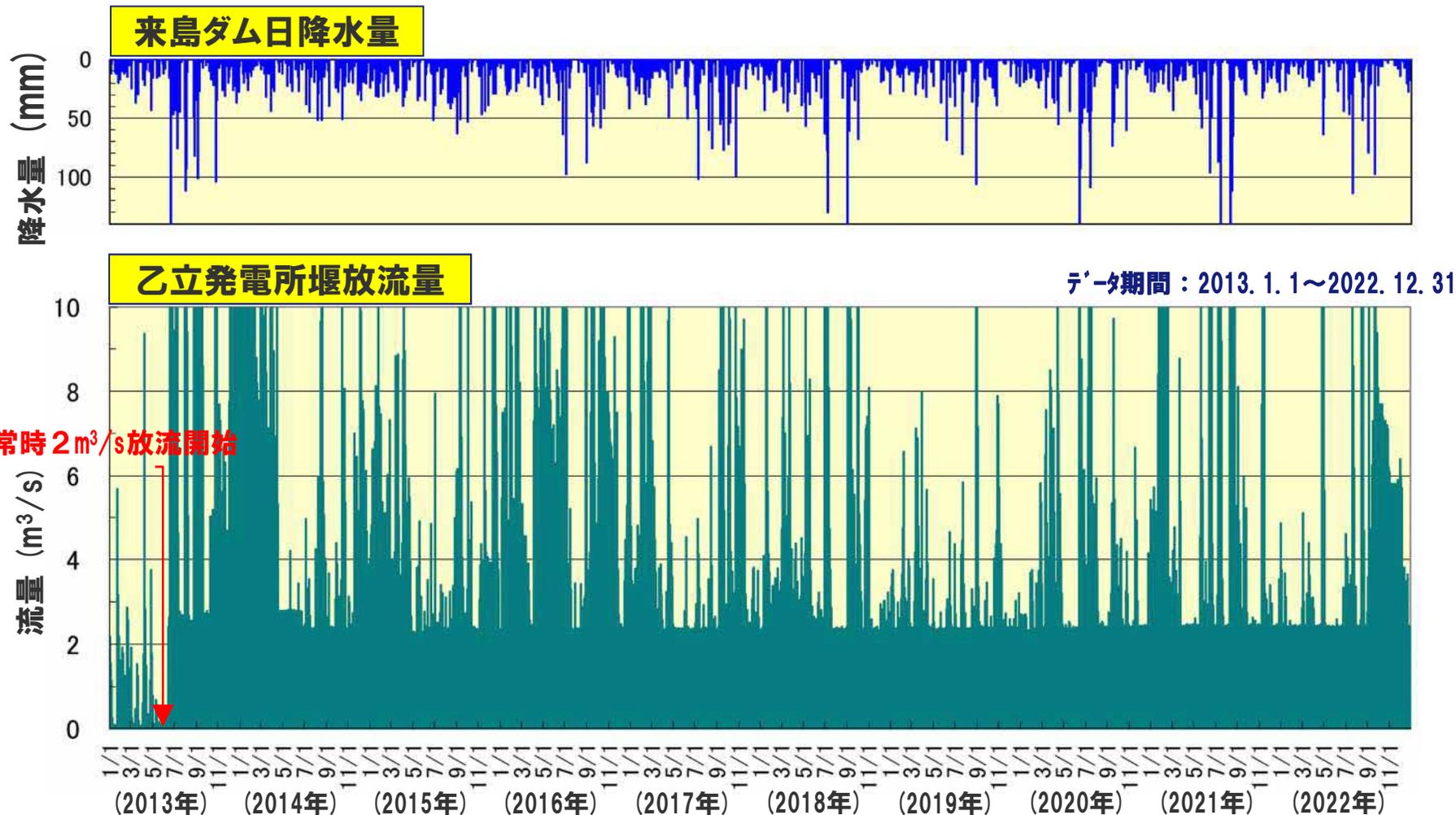
菅田測水所河川流量



※1 2013年6月から増放流を開始しているため、2013年の流況は表示しない。

## (2) 流量データ確認 (④乙立発電所八幡原堰の放流量)

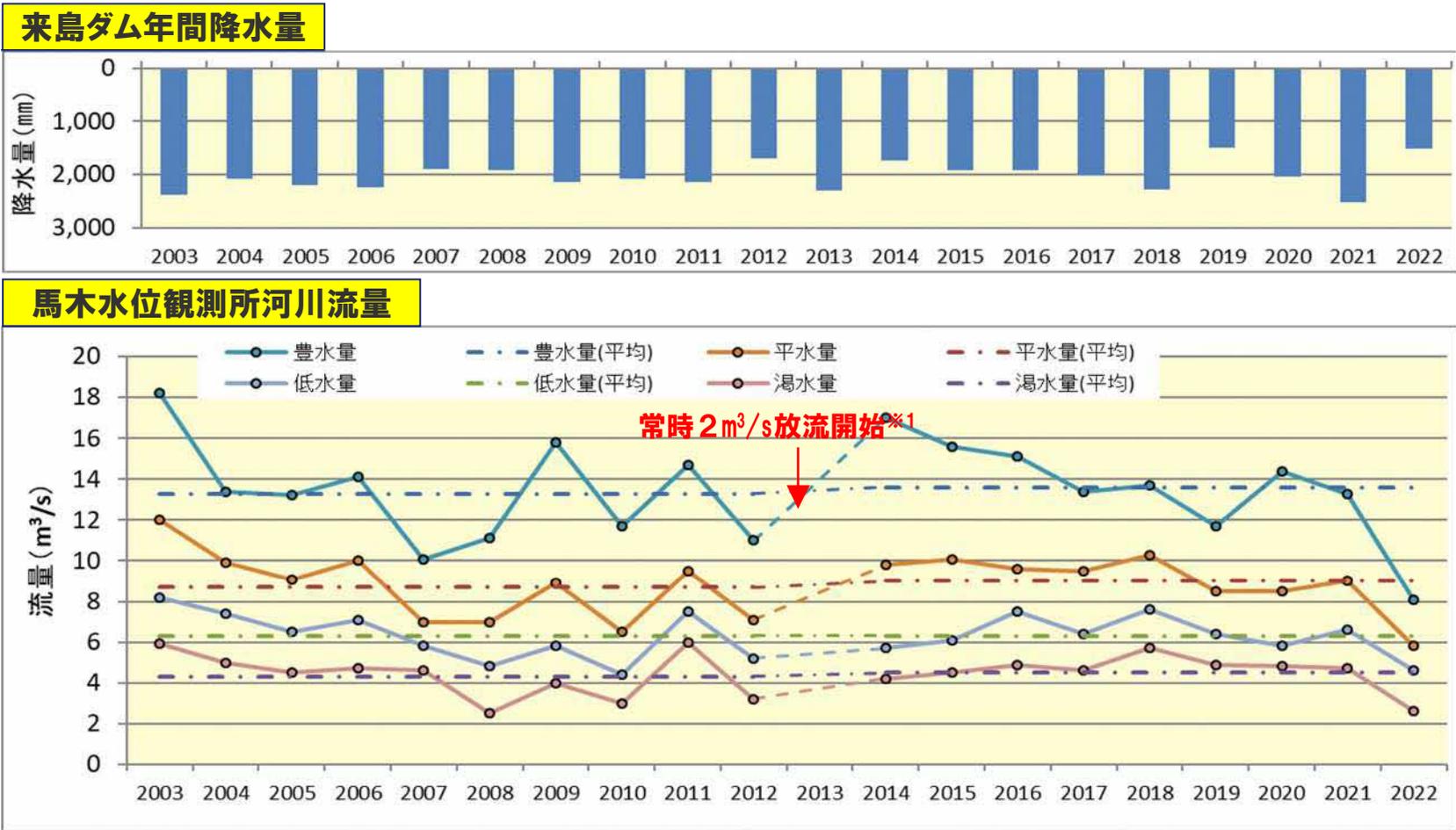
○乙立発電所八幡原堰では、増放流前の堰越流の頻度が低かったが、常時 $2\text{m}^3/\text{s}$ 放流後は、波多川合流地点までの減水区間の流況が大幅に改善され、河川流況が安定し続けている。



注：期間中、断水作業等のため放流量が算定できない場合は、菅田流量－残流域流量により放流量を計算。

## (2) 流量データ確認 (⑤馬木水位観測所の河川流量)

- 馬木水位観測所地点では、残流域の影響が大きく流量の増加は表れにくい。
- 常時  $2\text{ m}^3/\text{s}$  放流により渇水時流量の安定化が図れたと考えられるが、2022年は5月から7月中旬に記録的な渇水となり、河川流量も至近年と比較し減少した。



※1 2013年6月から増放流を開始しているため、2013年の流況は表示しない。

(3) 生物調査

2013年度	目 的	発電所減水区間の魚類の分布・生息状況の変化を確認
	調査内容※	a. 採捕調査 (神戸川漁協の調査協力により実施)
	調査地点	窪田発電所の減水区間(全域:約2.4km) 乙立発電所の減水区間(八幡原取水堰～波多川合流地点:約1.5km)
	調査日	2013年6月～ 継続中
2014年度	目 的	堰上下流の生態系の変化を確認
	調査内容※	b. 潜水観察調査、c. 採餌調査、d. 底生動物調査、 e. 付着藻類調査
	調査地点	窪田・乙立発電所の堰上下流
	調査日	2014年6月～ 継続中

※ 生物調査は、平成28年度版 河川水辺の国勢基本調査マニュアル(平成28年1月)等に準拠した調査方法により実施

### (3) 生物調査 位置図

調査項目	調査地点	
a. 採捕調査	—	発電所減水区間 (乙立は波多川合流地点まで)
b. 潜水調査	★	窪田・八幡原堰上下流地点
c. 採餌調査		
d. 底生動物調査		
e. 付着藻類調査		



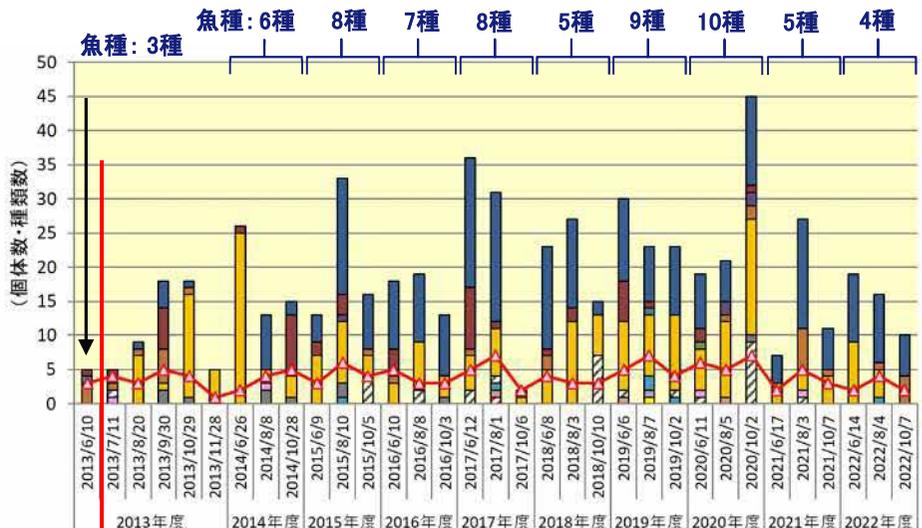
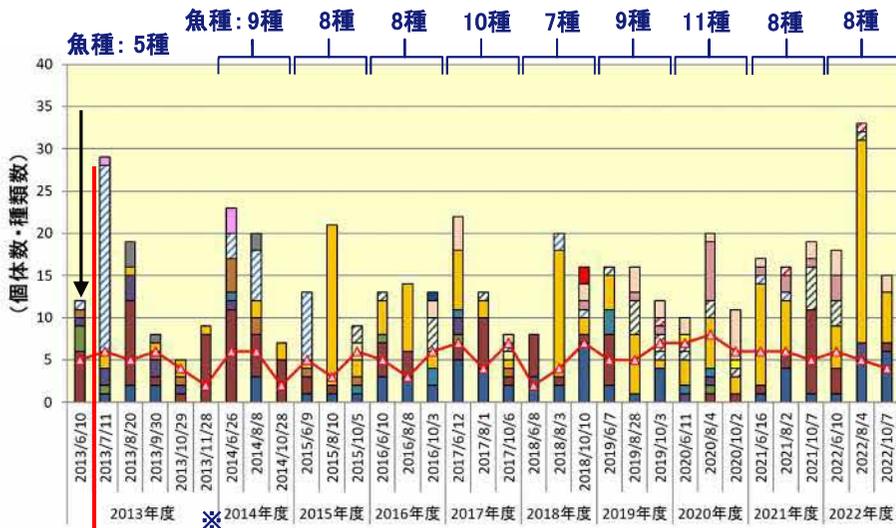
### (3) 生物調査 a. 採捕調査：2013年～

○窪田(発)、乙立(発)の減水区間で食物連鎖の上位に位置するカメが安定的に捕獲されている。

【窪田発電所減水区間】

【乙立発電所減水区間】

- |         |        |        |         |       |        |        |
|---------|--------|--------|---------|-------|--------|--------|
| ■ アユ    | ■ カワムツ | ■ オイカワ | ■ ウグイ   | ■ ドンコ | ■ ウナギ  | ■ カニ   |
| ■ ギギ    | ■ カマツカ | ■ ニゴイ類 | ■ フナ    | ■ カメ  | ■ ムギツク | ■ スッポン |
| ■ テナガエビ | ■ スジエビ | ■ カワニナ | ■ フナ属一種 | ▲ 種類数 |        |        |



常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流開始後 →

常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流開始後 →

※：2013. 11. 28は河川水量が多く一部の地点で実施

# (4) 生物調査 b. 潜水観察調査 (窪田堰) : 2014年～

○常時 2 m<sup>3</sup>/s 放流開始後の魚類の生息密度・種類数に大きな変化は見られない。  
○良好な瀬の生態系の指標と考えられるカワヨシノボリは、堰上下流で確認されている。

## 【窪田堰上流】

(種類数 : 2014年 7種, 2015年 6種, 2016年 7種, 2017年 7種,  
2018年 4種, 2019年 7種, 2020年 6種, 2021年 6種, 2022年 8種)

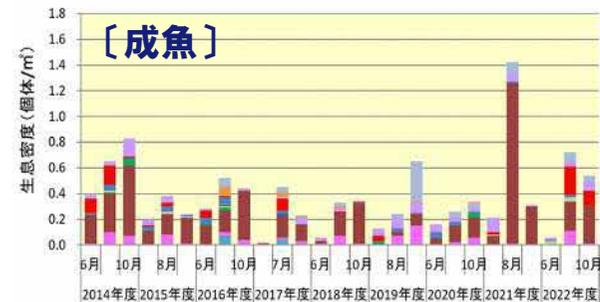
■ カワヨシノボリ    ■ アユ    ■ ナマズ    ■ シマドジョウ  
■ フナ類    ■ ニゴイ類    ■ カマツカ    ■ ウグイ  
■ カワムツ    ■ オイカワ    ■ ムギツク



## 【窪田堰下流】

(種類数 : 2014年 10種, 2015年 10種, 2016年 10種, 2017年 8種,  
2018年 8種, 2019年 8種, 2020年 6種, 2021年 7種, 2022年 8種)

■ カワヨシノボリ    ■ アユ    ■ ナマズ    ■ シマドジョウ  
■ フナ類    ■ ニゴイ類    ■ カマツカ    ■ ウグイ  
■ カワムツ    ■ オイカワ    ■ ムギツク



- ・成魚: 成魚または外部形態が成魚と同じまで成長している個体。
- ・稚魚: 成魚と外部形態が異なり、今年に生まれたばかりと思われる個体。
- ・幼魚: 成魚と外部形態は同じであるが、明らかにサイズが小さい個体。未成魚。

# (4) 生物調査 b. 潜水観察調査 (八幡原堰) : 2014年～

- 2022年は取水堰上・下流ともに成魚と幼魚の生息密度増加傾向が認められた。
- 良好な瀬の生態系の指標と考えられるカワヨシノボリは、堰上下流で確認されている。

## 【八幡原堰上流】

(種類数：2014年 13種, 2015年 11種, 2016年 9種, 2017年 11種, 2018年 6種, 2019年 7種, 2020年 8種, 2021年 6種, 2022年 9種)

- ウナギ
- ナマズ
- カマツカ
- カワヨシノボリ
- シマドジョウ
- ムギツク
- オオヨシノボリ
- フナ類
- ウグイ
- ドンコ
- イトモロコ
- カワムツ
- アユ
- ニゴイ類
- オイカワ



## 【八幡原堰下流】

(種類数：2014年 10種, 2015年 12種, 2016年 9種, 2017年 9種, 2018年 12種, 2019年 12種, 2020年 9種, 2021年 11種, 2022年 12種)

- カワヨシノボリ
- シマドジョウ
- カマツカ
- オオヨシノボリ
- フナ類
- ムギツク
- ドンコ
- イトモロコ
- ウグイ
- アユ
- コイ
- カワムツ
- ナマズ
- ニゴイ類
- オイカワ



- ・成魚：成魚または外部形態が成魚と同じまで成長している個体。
- ・幼魚：成魚と外部形態は同じであるが、明らかにサイズが小さい個体。未成魚。

- ・稚魚：成魚と外部形態が異なり、今年に生まれたばかりと思われる個体。

## (4) 生物調査 b. 潜水観察調査：カワヨシノボリ



分類	ハゼ科・ヨシノボリ属
分布	中部以西の本州、四国、九州など
生息環境	河川中・上流域の平瀬
形態	4～6cm程度
別名	ゴリ、カワハゼ、島根県ではチゴリ、チヨロケン(混称)
食性	水生昆虫や付着藻類を食べる雑食性

## (4) 生物調査 c. 採餌調査：2014年～（1/9）

○魚類の胃内容物調査の結果は、各魚種とも一般的な食性を示している。

### 主な内容物

－：捕獲されず

魚種	地点	調査年度	区分	窪田堰		八幡原堰		総評
				上流	下流	上流	下流	
アユ	2014年	藻類(藍藻)	－	・ホモエオスリックス	－	・ホモエオスリックス	藻類食という食性を反映し、藍藻と珪藻を主に採餌	
		藻類(珪藻)	－	－	－	・ツメケイソウ, フネケイソウ		
	2016年	藻類(藍藻)	・ホモエオスリックス	・ホモエオスリックス	・ホモエオスリックス	・ホモエオスリックス		
		藻類(珪藻)	・ツメケイソウ	・ツメケイソウ	－	・ツメケイソウ		
	2017年	藻類(藍藻)	・ホモエオスリックス	・ホモエオスリックス	・ホモエオスリックス	・ホモエオスリックス		
		藻類(珪藻)	・ツメケイソウ	・ツメケイソウ	・ツメケイソウ	・ツメケイソウ		
	2018年	藻類(藍藻)	・ホモエオスリックス	・ホモエオスリックス	・ホモエオスリックス	・ホモエオスリックス		
		藻類(珪藻)	・ツメケイソウ	・ツメケイソウ	・ツメケイソウ	・ツメケイソウ		
	2019年	藻類(藍藻)	－	・タビノスリックス ※	・タビノスリックス ※	・タビノスリックス ※		
		藻類(珪藻)	・ツメケイソウ	・メロシラ, ウルナリア	・ツメケイソウ	・メロシラ, ウルナリア		
	2020年	藻類(藍藻)	・タビノスリックス ※	・タビノスリックス ※	－	・タビノスリックス ※, フォルミジウム		
		藻類(珪藻)	・ツメケイソウ, クサビケイソウ	・ツメケイソウ	－	・ウルナリア, ツメケイソウ, クチビルケイソウ		
	2021年	藻類(藍藻)	・タビノスリックス	・タビノスリックス	・タビノスリックス	・タビノスリックス		
		藻類(珪藻)	・メロシラ, ウルナリア, クチビルケイソウ, クサビケイソウ	・メロシラ, ウルナリア, クチビルケイソウ, クサビケイソウ	・メロシラ, ウルナリア, オビケイソウ	ウルナリア, オビケイソウ		
		藻類(緑藻)	－	－	・トゲナシツルギ	・トゲナシツルギ		

※タビノスリックスとは、ホモエオスリックスの新称である（2019年度から学名が変更）。

## (4) 生物調査 c. 採餌調査：2014年～（2/9）

○魚類の胃内容物調査の結果は、各魚種とも一般的な食性を示している。

### 主な内容物

－：捕獲されず

魚種	地点	調査年度	区分	窪田堰		八幡原堰		総評
				上流	下流	上流	下流	
アユ		2022年	藻類(藍藻)	・タビノスリックス	・タビノスリックス	・タビノスリックス	・タビノスリックス	藻類食という食性を反映し、藍藻と珪藻を主に採餌
			藻類(珪藻)	・ツメケイソウ,コッコネイス,クサビケイソウ	・メロシラ,ツメケイソウ,ツメワカレケイソウ,コッコネイス	・ツメケイソウ,コッコネイス	・ツメケイソウ, コッコネイス	

※タビノスリックスとは、ホトスリックスの新称である（2019年度から学名が変更）。

(4) 生物調査 c. 採餌調査：2014年～(3/9)

主な内容物

－：捕獲されず

魚種	地点	調査年度	区分	窪田(発)取水堰		乙立(発)取水堰		総評
				上流	下流	上流	下流	
カワヨシノ ボリ		2014年	動物	・シジミ類、水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目他)	・水生昆虫(カゲロウ目、ガガンボ類他)	・水生昆虫類(カゲロウ目、トビケラ目)	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目他)、魚類	水生昆虫食という食性を反映し、水生昆虫等の動物が消化管内にあったものの、2022年は藻類の体積比が高い個体もみられた。
		2017年	動物	・水生昆虫(カゲロウ目)	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目他)	・水生昆虫(カゲロウ目)	・カイエビ類、水生昆虫(カゲロウ目他)	
		2018年	動物	・水生昆虫(カゲロウ目)	・水生昆虫(カゲロウ目、ユスリカ科)	・水生昆虫(カゲロウ目)	・水生昆虫(カゲロウ目他)	
		2019年	動物	・水生昆虫(カゲロウ目)	・水生昆虫(カゲロウ目、ユスリカ科)	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目、ユスリカ科)	・水生昆虫(カゲロウ目)、魚類	
		2020年	動物	・水生昆虫(カゲロウ目)	・水生昆虫(カゲロウ目、ユスリカ科)	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目、ユスリカ科)	・メロシラ、ウルナリア、ハラミクチビルケイソウ、	
		2021年	動物	水生昆虫(コカゲロウ属、マダラカゲロウ属、ユスリカ科)	水生昆虫(マダラカゲロウ属、ユスリカ科)	－	水生昆虫(コカゲロウ属、コガタシマトビケラ属)	
	藻類(珪藻)		・メロシラ、ウルナリア、クチビルケイソウ、クサビケイソウ	・メロシラ、ウルナリア、クチビルケイソウ、クサビケイソウ	・メロシラ、ウルナリア、クチビルケイソウ、オビケイソウ	・メロシラ、ウルナリア、オビケイソウ		
	藻類(緑藻)	・スチゲオクロニウム		・スチゲオクロニウム、トゲナシツルギ	・トゲナシツルギ			

## (4) 生物調査 c. 採餌調査：2014年～（4/9）

### 主な内容物

—：捕獲されず

魚種	地点	調査年度	区分	窪田堰		八幡原堰		総評
				上流	下流	上流	下流	
カワヨシノボリ		2022年	動物	<ul style="list-style-type: none"> <li>水生昆虫 (ナミトビイシカゲロウ,フタバコカゲロウ,コカゲロウ属,シロタニガワカゲロウ,マダラカゲロウ属,エラブタマダラカゲロウ,チラカゲロウ,コガタシマトビケラ属,ウスバガガンボ属,ユスリカ科)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>水生昆虫 (ヒメトビイロカゲロウ,シロタニガワカゲロウ,マダラカゲロウ属,チラカゲロウ,ユスリカ科)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ミス'類(イトミス'目)</li> <li>水中昆虫(コカゲロウ属,マダラカゲロウ属,エルモンヒラタカゲロウ,コガタシマトビケラ属)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>水生昆虫(コカゲロウ属,マダラカゲロウ属,エルモンヒラタカゲロウ)</li> </ul>	水生昆虫食という食性を反映し、水生昆虫等の動物が消化管内にあったものの、2022年は藻類の体積比が高い個体もみられた。
			藻類(珪藻)	—	・メロシラ,ツメケイソウ	・ウルナリア,コッコネイス	・フレウロシラ,メロシラ,ツメケイソウ,コッコネイス	
			藻類(緑藻)	—	—	・トゲナシツルギ	—	

(4) 生物調査 c. 採餌調査：2014年～(5/9)

主な内容物

－：捕獲されず

魚種	地点	調査年度	区分	窪田(発)取水堰		乙立(発)取水堰		総評
				上流	下流	上流	下流	
カワムツ	2014年	動物	・シジミ類、水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目他)	・シジミ類、水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目他)	－	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目他)、魚類他	動物食の食性を反映し、動物(水生昆虫)を主に採餌	
		藻類(緑藻)	－	・カワシオグサ、サヤミドロ他	・カワシオグサ	－		
		2017年	動物	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目)、陸上昆虫類(アリ類)	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目)、陸上昆虫類(アリ類)	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目)		・陸上昆虫類(アリ類)
			植物片	－	－	－		・カナダモ類
			藻類(緑藻)	・サヤミドロ、カワシオグサ	－	・サヤミドロ、カワシオグサ		－
		2018年	動物	・貝類(シジミ属)、水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目)	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目)	・水生昆虫(トビケラ目、ヒメドロムシ)		・水生昆虫(カゲロウ目)
	植物片		－	－	－	・カナダモ類		
	藻類(緑藻)		・サヤミドロ、アオミドロ	・サヤミドロ	・トゲナシツルキ、サヤミドロ、アオミドロ	・カワシオグサ、アオミドロ		
	2019年	動物	・水生昆虫(カゲロウ目、サナエトンボ科)	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目)	－	・水生昆虫(カゲロウ目)		
		植物片	－	－	－	－		
		藻類(緑藻)	・カワシオグサ	・カワシオグサ、ネダシグサ	－	・サヤミドロ		
	2020年	動物	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目)、陸上昆虫類(アリ科)	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目)	・水生昆虫(カゲロウ目、トビケラ目、ヒラタドロムシ科)	・水生昆虫(カゲロウ目、ユスリカ科)		
		植物片	・カナダモ類	－	－	－		
		藻類(緑藻)	－	・サヤミドロ、カワシオグサ、アオミドロ	・スチゲオクロニウム、アオミドロ	・スチゲオクロニウム、サヤミドロ、カワシオグサ、アオミドロ		

## (4) 生物調査 c. 採餌調査：2014年～(6/9)

### 主な内容物

—：捕獲されず

地点 魚種	調査年度	区分	窪田(発)取水堰		乙立(発)取水堰		総評
			上流	下流	上流	下流	
カワムツ	2021年	動物	・水生昆虫 (アシマダラブユ属)	・扁形動物類(ナミズムシ)、 水生昆虫(カゲロウ目他)、 陸上昆虫類(コウチュウ目)	・環形動物類(ヒル網)、 水生昆虫類(マダラカゲロウ属)	・環形動物類(ヒル網)、 水生昆虫類(マダラカゲロウ族、コカゲロウ属)、 陸上昆虫類(アリ科)	動物食の食性を反映し、動物(水生昆虫)を主に採餌
		藻類(珪藻)	・メロシラ、ウルナリア、 クチビルケイソウ、	・ウルナリア	・メロシラ、ウルナリア、 オビケイソウ、	・メロシラ、ウルナリア、 オビケイソウ、	
		藻類(緑藻)	—	—	・スチゲオクロニウム、トゲナシツルギ	・スチゲオクロニウム、トゲナシツルギ	
	2022年	動物	・水生昆虫 (マダラカゲロウ属、チラカゲロウ属、カゲロウ目)	・水生昆虫(カゲロウ目、カワゲラ科)、 陸上昆虫類(セミ科、アリ科)	・水生昆虫類(フタバコカゲロウ、ウエノヒラタカゲロウ、 チラカゲロウ、カゲロウ目、ヒゲナガカワトビケラ)	・水生昆虫類(カゲロウ目、 カワゲラ科、アオヒゲナガトビケラ属)、 陸上昆虫類(コウチュウ目)	
		藻類(珪藻)	—	・メロシラ、ツメケイソウ	・メロシラ、コッコネイス	・フレウロシラ、メロシラ、 ツメケイソウ、コッコネイス	
		藻類(緑藻)	—	・サヤミト'ロ、アオミト'ロ	—	・サヤミト'ロ、カワシオグサ	

## (4) 生物調査 c. 採餌調査：2014年～(7/9)

### 主な内容物

－：捕獲されず

魚種	地点	調査年度	区分	窪田(発)取水堰		乙立(発)取水堰		総評
				上流	下流	上流	下流	
オイカワ	2014年	藻類(珪藻)	・ツメケイソウ, フネケイソウ	—	—	—	—	雑食性の食性を反映し、藻類(緑藻)を主体に動物(水中昆虫)を採餌
		藻類(緑藻)	・カワシオグサ, サヤミド口他	—	—	—	・アオミド口	
	2016年	—	—	—	—	—	—	
	2017年	—	—	—	—	—	—	
	2018年	—	—	—	—	—	—	
	2019年	—	—	—	—	—	—	
	2020年	—	—	—	—	—	—	
	2021年	—	—	—	—	—	—	
	2022年	—	—	—	—	—	—	

## (4) 生物調査 c. 採餌調査：2014年～(8/9)

- 空胃個体（胃中が空の個体）は、2014年は各取水堰で確認されたが、至近の2019年、2020年および2022年は確認されなかった。
- いずれの堰の下流でも経年的に空胃個体がほとんど見られないことから、増放流による堰下流の環境の変化が確認できる。

調査年	魚種	窪田(発)窪田堰										乙立(発)八幡原堰										備考
		上流					下流					上流					下流					
		10	20	30	40	50	10	20	30	40	50	10	20	30	40	50	10	20	30	40	50	
2014	アユ カワヨシノボリ カワムツ	■					■	■				■					■					空胃個体なし
2015	アユ カワヨシノボリ カワムツ																					空胃個体なし 空胃個体なし 空胃個体なし
2016	アユ カワヨシノボリ カワムツ											■	■									空胃個体なし 空胃個体なし
2017	アユ カワヨシノボリ カワムツ											■	■	■			■					空胃個体なし
2018	アユ カワヨシノボリ カワムツ						■	■														空胃個体なし 空胃個体なし
2019	アユ カワヨシノボリ カワムツ																					空胃個体なし 空胃個体なし 空胃個体なし
2020	アユ カワヨシノボリ カワムツ																					空胃個体なし 空胃個体なし 空胃個体なし
2021	アユ カワヨシノボリ カワムツ	■															■					空胃個体なし

(4) 生物調査 c. 採餌調査：2014年～(9/9)

調査年	魚種	窪田(発)窪田堰										乙立(発)八幡原堰										備考					
		上流					下流					上流					下流										
		10	20	30	40	50	10	20	30	40	50	10	20	30	40	50	10	20	30	40	50						
2022	アユ カワヨシノボリ カワムツ																										空胃個体なし 空胃個体なし 空胃個体なし

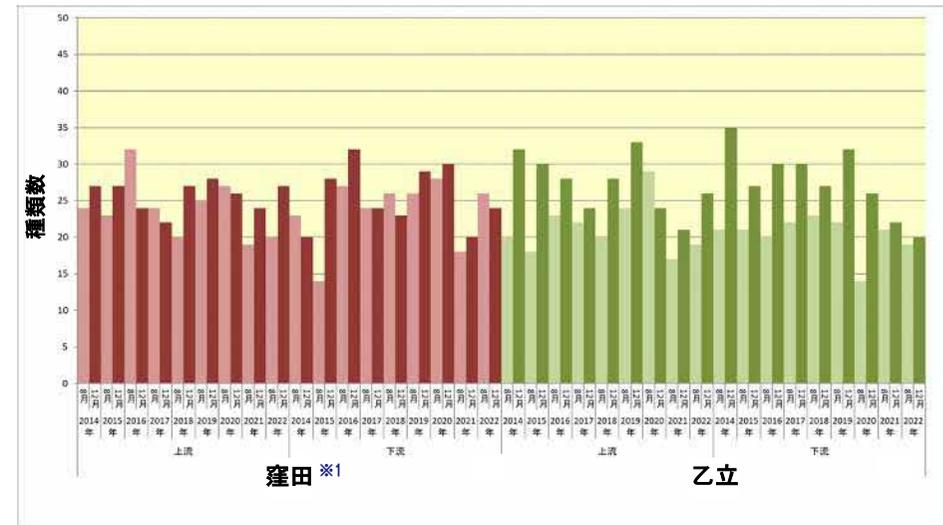
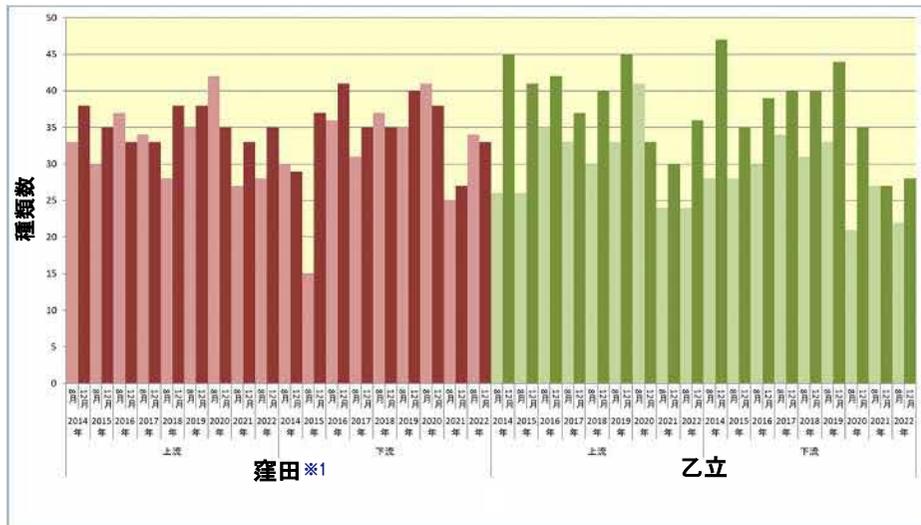
## (5) 生物調査 d. 底生動物調査 (定量採取) : 2014年～

- 各堰上下流の底生動物の全種類数は、大きな差異はみられない。  
また、底生動物の主要分類群であるトビケラ目・カゲロ目・カケラ目の種類数についても、同様の傾向であった。
- 安定した早瀬の指標となる大型の造網型昆虫であるヒゲナガカワトビケラ科や大型カワゲラ類（カミムラカワゲラ等）が各堰で確認された。

定量採取結果（早瀬の中央付近で採取し、種の同定と現存量を確認）

【全種類数】

【トビケラ目・カゲロ目・カケラ目の種類数】



※1 2014年は、12月調査時に河川流量が多かったため、1月に実施。

凡例

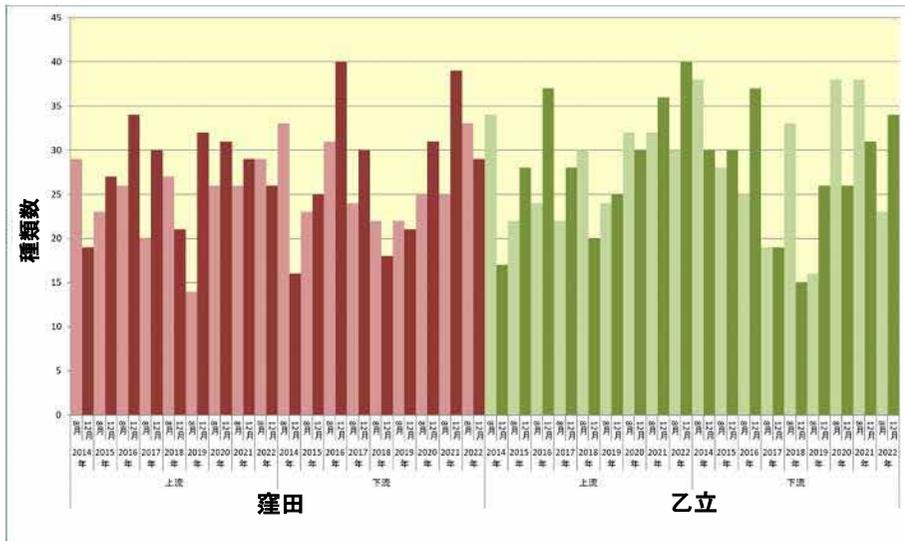
- 上期調査分 (窪田)      ■ 下期調査分 (窪田)
- 上期調査分 (乙立)      ■ 下期調査分 (乙立)

(5) 生物調査 d. 底生動物調査 (定性採取) : 2014年～

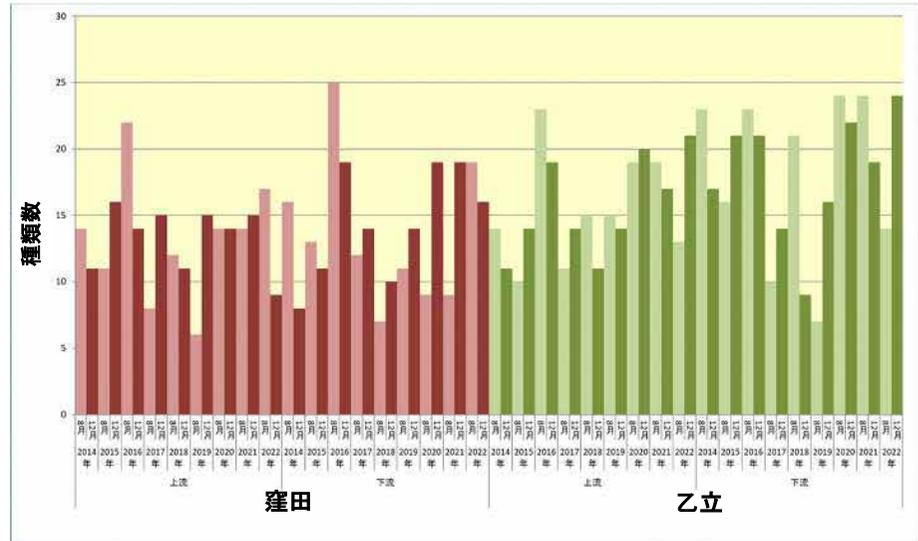
○各堰上下流の底生動物の全種類数は、大きな差異はみられない。  
また、底生動物の主要分類群であるトビケラ目・カゲロウ目・カワゲラ目に加え、  
流れが緩やかな所に多く食物連鎖の上位に位置するトンボ目も各堰で確認された。

定性採取結果 (淵、沈水植物群落内等の環境別に採取し種を同定)

【全種類数】



【トビケラ目・カゲロウ目・カワゲラ目の種類数】



凡例  
■ 上期調査分 (窪田)    ■ 下期調査分 (窪田)  
■ 上期調査分 (乙立)    ■ 下期調査分 (乙立)

## (5) 生物調査 d. 底生動物調査：造網型昆虫



写真：ヒゲナガカワトビケラ

分類	トビケラ目ヒゲナガカワトビケラ
分布	北海道～九州
生息環境	河川中・上流域にかけての流れの速い早瀬
形態	成虫：11～18mm程度
食性	河川水中の流下物を濾過摂食する雑食性



写真：カミムラカワトビケラ

分類	カワゲラ目カワゲラ科
分布	北海道～九州
生息環境	河川中・上流域にかけての流れの速い早瀬
形態	成虫：20～26mm程度
食性	幼虫は主として水生の小昆虫を摂食する肉食性

出典：岐阜聖徳学園大学昆虫図鑑

## (6) 生物調査 e. 付着藻類調査：2014年～

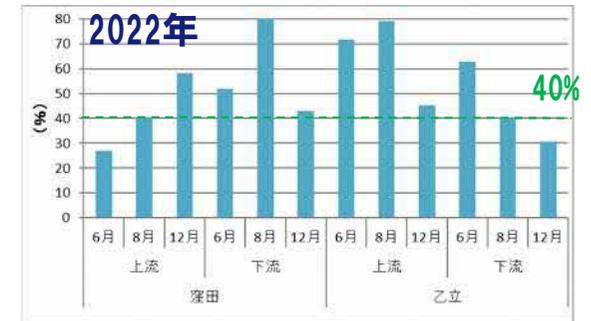
○川底の石に付着している藻類(植物)はアユの餌料となる珪藻が主に確認されている。藍藻ではアユの生育に必要とされるタピノスリックスが確認された。  
○アユの餌場となる目安として、強熱減量40%以上という知見<sup>※1</sup>があり、2022年は強熱減量(石表面付着物の総有機物量)が概ね40%を上回る結果となった。

■ 藍藻網 ■ 珪藻網 ■ 緑藻網 ■ 紅藻網 ● 種類数

付着藻類数<sup>※2</sup>・種類数



強熱減量



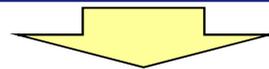
※1 アユの餌資源としての観点からみた河床付着物の評価：土木研究所

※2 藍藻網は、群体数、糸状体数を計数

※3 2014年の窪田取水堰下流調査は、12月調査時に河川流量が多かったため、1月に実施。

## 2. 常時 2 m<sup>3</sup>/s放流の検証（まとめ）

調査項目		確認した河川環境改善効果
河川調査 (写真撮影・現地調査)		水面幅・水深の増加により水量感の増加が見られる。 特に窪田(発)、乙立(発)の減水区間の水量感の増加が顕著である。
流量データ確認		常時 2 m <sup>3</sup> /s放流後、全ての地点で流況が改善された。
生物調査	採捕調査※	常時 2 m <sup>3</sup> /s放流後、窪田(発)、乙立(発)の減水区間で魚種・個体数が増加し、食物連鎖の上位種であるカメが安定して捕獲できるようになった。
	潜水調査※	良好な瀬の生態系の指標とされるカワヨシノボリが安定して確認出来ている。
	採餌調査※	胃の中の空の個体がほとんど見られず、採餌環境が良好と考えられる。
	底生動物調査※	良好な早瀬の指標であるヒゲナガカワトビケラ、瀬の底生動物の食物連鎖の上位種であるカワゲラが安定して確認出来ている。
	付着藻類調査	餌場の良好さを示す指標種として着目されている藍藻やアユの餌である珪藻は経年的に増加傾向を示している。
<p>※上記「採捕、潜水、採餌、底生動物調査」の専門家（広島大学大学院生物圏科学研究科 海野教授）のご見解（2022年12月23日）。</p> <p>「過去にいた魚類が確認されなくなる現象も見られず、堰上流と比べ堰下流の種類数や現存量が著しく少ない状況にもないことから、増放流による環境改善傾向の継続性は維持されていると言える。」</p>		



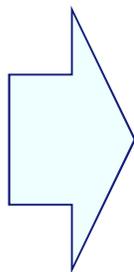
常時 2 m<sup>3</sup>/s放流の実施により、一定の環境改善効果が継続しているものと認識する。

## 参考資料

- 参考1: 減水区間対策 窪田堰
- 参考2: 減水区間対策 八幡原堰
- 参考3: 河川調査 状況写真

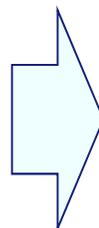
## 【参考1】減水区間対策【窪田堰魚道改造状況】

- 2014年度に魚道内の隔壁天端をR型にするとともに魚道出口を上下流に向けて植石扇型に改造した。



## 【参考2】減水区間対策【八幡原堰魚道改造状況】

- 2013年度に魚道に側水路を設置
- 2014年度に魚道出口の段差と測水路出口の導流壁を追加改修



【参考3】 (1) 河川調査 a (① 来島ダム下流 丸山地点)

○水位がやや上昇した。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	-※	約 1. 3
2013. 6. 13 (実施直後)	2. 0	-※	約 2. 2
2014. 6. 17 (実施後1年)	2. 0	-※	約 2. 1
2015. 6. 9 (実施後2年)	2. 0	-※	約 2. 3
2016. 6. 17 (実施後3年)	2. 0	-※	約 2. 2
2017. 5. 16 (実施後4年)	2. 0	-※	約 2. 3
2018. 5. 18 (実施後5年)	2. 0	-※	約 2. 6
2019. 5. 24 (実施後6年)	2. 0	-※	約 2. 5
2020. 5. 15 (実施後7年)	2. 0	-※	約 2. 3
2021. 5. 14 (実施後8年)	2. 0	-※	約 2. 1
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	-※	約 2. 0



※ 来島ダム直下の支流合流部であり、河川形状の特性からW/B評価はできない。

【参考3】(1) 河川調査 a (2) 八神観測所橋梁

- 水位変化は見られない。
- 実施後9年が経過し、水面幅が安定。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	4 2	約 1. 7
2013. 6. 13 (実施直後)	2. 0	4 9	約 2. 5
2014. 6. 17 (実施後1年)	2. 0	4 9	約 2. 3
2015. 6. 9 (実施後2年)	2. 0	5 0	約 2. 6
2016. 6. 17 (実施後3年)	2. 0	4 7	約 2. 5
2017. 5. 16 (実施後4年)	2. 0	5 5	約 2. 6
2018. 5. 18 (実施後5年)	2. 0	5 9	約 3. 2
2019. 5. 24 (実施後6年)	2. 0	5 9	約 3. 0
2020. 5. 15 (実施後7年)	2. 0	6 1	約 2. 7
2021. 5. 14 (実施後8年)	2. 0	6 1	約 2. 3
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	6 8	約 2. 0



【参考3】 (1) 河川調査 a (3) 横見橋

- 水位変化は見られない。
- 実施後8年が経過し、水面幅が安定。

年月日	ダム放流量 ( $m^3/s$ )	W/B (%)	河川流量 ( $m^3/s$ ) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	6 3	約 3
2013. 6. 13 (実施直後)	2. 0	6 5	約 4
2014. 6. 17 (実施後1年)	2. 0	6 5	約 5
2015. 6. 9 (実施後2年)	2. 0	6 2	約 4
2016. 6. 17 (実施後3年)	2. 0	6 3	約 4
2017. 5. 16 (実施後4年)	2. 0	6 0	約 4
2018. 5. 18 (実施後5年)	2. 0	5 8	約 7
2019. 5. 24 (実施後6年)	2. 0	6 2	約 5
2020. 5. 15 (実施後7年)	2. 0	6 3	約 3
2021. 5. 14 (実施後8年)	2. 0	6 7	約 5. 8
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	6 3	約 4. 2



# 【参考3】(1) 河川調査 a (④窪田堰下流アーチ橋：減水区間)

- 改善後は水位上昇による転石の水没が顕著に見られ水量感が増加。
- 実施後9年が経過し、水面幅が安定。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	8	約0. 3
2013. 6. 13 (実施直後)	2. 0	21	約2
2014. 6. 17 (実施後1年)	2. 0	21	約2
2015. 6. 9 (実施後2年)	2. 0	21	約2
2016. 6. 17 (実施後3年)	2. 0	22	約2
2017. 5. 16 (実施後4年)	2. 0	22	約4
2018. 5. 18 (実施後5年)	2. 0	22	約5
2019. 5. 24 (実施後6年)	2. 0	22	約3
2020. 5. 15 (実施後7年)	2. 0	23	約3
2021. 5. 14 (実施後8年)	2. 0	25	約3. 1
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	25	約3



【参考3】(1) 河川調査 a (⑤伊佐川合流後本川)

- 改善前の状態でもある程度の水量感がある。
- 出水で砂州ができ、水面幅が大きく減少した。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	3 2	約5
2013. 6. 13 (実施直後)	2. 0	3 3	約6
2014. 6. 17 (実施後1年)	2. 0	3 8	約7
2015. 6. 9 (実施後2年)	2. 0	4 0	約7
2016. 6. 17 (実施後3年)	2. 0	3 7	約7
2017. 5. 16 (実施後4年)	2. 0	3 7	約7
2018. 5. 18 (実施後5年)	2. 0	3 7	約7
2019. 5. 24 (実施後6年)	2. 0	3 7	約7
2020. 5. 15 (実施後7年)	2. 0	3 8	約7
2021. 5. 14 (実施後8年)	2. 0	3 7	約6. 2
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	1 8	約6. 4



# 【参考3】(1) 河川調査 a (⑥八幡原橋)

- 改善前の状態でもある程度の水量感がある。
- 河道の形態から、水面幅の変化はほとんど見られない。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	7 0	約 5
2013. 6. 13 (実施直後)	2. 0	7 3	約 6
2014. 6. 17 (実施後1年)	2. 0	7 6	約 7
2015. 6. 9 (実施後2年)	2. 0	7 0	約 6
2016. 6. 17 (実施後3年)	2. 0	7 1	約 7
2017. 5. 16 (実施後4年)	2. 0	7 1	約 7
2018. 5. 18 (実施後5年)	2. 0	7 1	約 1 0
2019. 5. 24 (実施後6年)	2. 0	6 6	約 8
2020. 5. 15 (実施後7年)	2. 0	6 6	約 8
2021. 5. 14 (実施後8年)	2. 0	7 0	約 6. 3
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	6 4	約 6. 4



【参考3】 (1) 河川調査 a (⑦八幡原堰下流橋梁：減水区間)

○改善後は水面幅、水深が増加した。  
○実施後9年が経過し、水面幅が安定。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	24	約0. 1
2013. 6. 13 (実施直後)	2. 0	43	約2. 7
2014. 6. 17 (実施後1年)	2. 0	34	約2. 8
2015. 6. 9 (実施後2年)	2. 0	43	約2. 6
2016. 6. 17 (実施後3年)	2. 0	43	約2. 4
2017. 5. 16 (実施後4年)	2. 0	43	約2. 4
2018. 5. 18 (実施後5年)	2. 0	44	約3. 5
2019. 5. 24 (実施後6年)	2. 0	53	約2. 4
2020. 5. 15 (実施後7年)	2. 0	54	約2. 4
2021. 5. 14 (実施後8年)	2. 0	52	約2. 4
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	63	約2. 4



【参考3】 (1) 河川調査 a (⑧香水橋：減水区間)

○改善後は転石、河床の水没が顕著に見られ水量感が増加。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	3 8	約 3
2013. 6. 13 (実施直後)	2. 0	5 5	約 5
2014. 6. 17 (実施後1年)	2. 0	6 7	約 6
2015. 6. 9 (実施後2年)	2. 0	4 9	約 5
2016. 6. 17 (実施後3年)	2. 0	4 4	約 5
2017. 5. 16 (実施後4年)	2. 0	4 0	約 5
2018. 5. 18 (実施後5年)	2. 0	4 1	約 8
2019. 5. 24 (実施後6年)	2. 0	3 8	約 7
2020. 5. 15 (実施後7年)	2. 0	3 8	約 5
2021. 5. 14 (実施後8年)	2. 0	3 8	約 3. 7
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	5 4	約 2. 4



【参考3】(1) 河川調査 a (㊟立久恵吊橋)

○改善後は、河床の水没が顕著に見られ水量感が増加。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	6 5	約 3
2013. 6. 13 (実施直後)	2. 0	6 7	約 6
2014. 6. 17 (実施後1年)	2. 0	7 5	約 8
2015. 6. 9 (実施後2年)	2. 0	7 5	約 8
2016. 6. 17 (実施後3年)	2. 0	7 8	約 5
2017. 5. 16 (実施後4年)	2. 0	7 8	約 6
2018. 5. 18 (実施後5年)	2. 0	7 7	約 1 0
2019. 5. 24 (実施後6年)	2. 0	7 7	約 8
2020. 5. 15 (実施後7年)	2. 0	7 8	約 6
2021. 5. 14 (実施後8年)	2. 0	7 7	約 4. 1
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	6 4	約 2. 4



【参考3】(1)河川調査 a (10)馬木堰

○堰の越流がやや増加した。

年月日	ダム放流量 (m <sup>3</sup> /s)	W/B (%)	河川流量 (m <sup>3</sup> /s) [推計値]
2013. 5. 30 (実施前)	1. 0	-※	約 8
2013. 6. 13 (実施直後)	2. 0	-※	約 9
2014. 6. 17 (実施後1年)	2. 0	-※	約 11
2015. 6. 9 (実施後2年)	2. 0	-※	約 11
2016. 6. 17 (実施後3年)	2. 0	-※	約 9
2017. 5. 16 (実施後4年)	2. 0	-※	約 10
2018. 5. 18 (実施後5年)	2. 0	-※	約 12
2019. 5. 24 (実施後6年)	2. 0	-※	約 9
2020. 5. 15 (実施後7年)	2. 0	-※	約 9
2021. 5. 14 (実施後8年)	2. 0	-※	約 9. 4
2022. 5. 20 (実施後9年)	2. 0	-※	約 9. 2



※ 馬木堰部であり、河川形状の特性からW/Bは評価はできない。